二三八年のローマ帝国

――「軍人皇帝」と元老院の戦い――

南川高志

【要約】ローマ帝国史における二三八年は、内乱の年である。二三五年に登位した最初の「軍人皇帝」マクシミヌスに対して生じたこの年の内乱は、元老院の積極的な行動により、遂にこの皇帝を打倒するに至った。多くの研究者の注意を引いたこの年の出来事について、本稿は元首政史上異例の積極性をみせた元老院の行動に焦点を当て、その原動力を解明することで、意義を捉えようと試みた。

先行研究、とりわけこの問題に重要な業績をなしたK・ディーツの見解を検討・批判したのち、その成果をふまえて筆者は次の如く論じている。即ち、マクシミヌスの登位と統治は、元老院議員階層からの皇帝の遊離を示すものであり、この深刻な事実から生じた危機感が、首都の元老院議員たちを団結させ、積極的な行動へと至らせた。その意味で、二三八年は、政治支配層としての元老院議員階層、そしてそれと協同してきた皇帝の政治体制、いわば「アリストクラシーとしての元首政」が最後の光を放った年なのである。

史林　七四巻三号　一九九一年五月

一

ローマ帝国は三世紀に未曾有の混乱と危機を経験するが、そのことは政治の面では「軍人皇帝時代」という言葉に集約的に表現されている。すなわち、この時代には、たたきあげの軍人が麾下の軍隊によって推戴されて皇帝となり、短期間統治したのち、同じく軍隊の手で、あるいは対立皇帝との戦いにおいて命を落とし、強力な政治指導や連続的な国政運営

ができなくなったとされているのである。それゆえ、この「軍人皇帝」の最初の人物マクシミヌスが登位した二三五年は、ローマ史を時代区分する際の重要な指標として、今日広く用いられている。

しかし、この二三五年を画期とする時代区分は、概ね古代の歴史家がすでに行なっているものをそのまま用いているにすぎず、[1]二三五年の出来事そのものについて、立ち入った分析や意義付けが今日の研究者によって特になされているわけではない。

これに比して多くの研究者の注意を集めたのは、このマクシミヌス帝に対して反乱が生じた二三八年であった。本稿で問題としようとするのも、二三八年の出来事の方である。この年の出来事については、史料の少ない時代であるゆえ、正確な月日などについて今日なお確定していない。けれども、以下で論ずるにあたり、問題を指摘し学説史を述べるに先立って、ごく簡単にでもこれを概観しておくことが必要であろう。[2]

セウェルス朝最後の皇帝アレクサンデル・セウェルスが、遠征先の今日のマインツ市付近で軍隊に殺害され、新兵の訓練責任者であったマクシミヌスが皇帝に宣言されたのは、二三五年三月のことである。マクシミヌスは息子にカエサルの位を与え、[3]また通例に反して首都には来ず、ライン地方やドナウ沿岸地方でゲルマン人相手に戦って勝利していたが、二三八年三月に北アフリカで反乱が勃発した。反マクシミヌスの動きは、小都市テュスドルス——現在のテュニジアのエル・ジェム——で都市の有力家系出身の若者たち（νεανίσκοι）が中心となって皇帝の代理であるプロクラートルを殺害したことに始まり、時の属州アフリカ総督マルクス・アントニウス・ゴルディアヌスを皇帝と宣言するに至った。この新皇帝、通称ゴルディアヌス一世は、息子を同僚皇帝ゴルディアヌス二世とし、首都の元老院の承認を求めた。

ローマの元老院は、この反乱を支持して新しい二皇帝を承認し、さらにマクシミヌス帝に対して公敵宣言を行ない、公然と対抗する姿勢を見せた。ところが、反乱した地方の近くにあったヌミディア総督カペリアヌスは、マクシミヌス帝に忠誠を誓い、第三アウグストゥス軍団を率いてゴルディアヌスたちを攻めたため、二人の新皇帝はわずか三週間余りの在

位で敗死してしまった。これでアフリカの反乱の主勢力は潰えたのであるが、首都の元老院はゴルディアヌスたちの敗死後「元老院決議による国家保護のための二〇人委員会」をつくり、その構成員である元老院議員の中からバルビヌスとプピエヌスという二人の新皇帝を選出して、あくまでもマクシミヌス帝に対し徹底抗戦しようとした。この新皇帝選出の際、首都民衆の要求を受け入れて、死んだゴルディアヌス一世の孫で一三歳のゴルディアヌス三世にカエサルの位を与えている。

この元老院の必死の行動を嘲笑うかのように、マクシミヌスは軍を率いてドナウ地方のシルミウムよりゆっくりとイタリアにむかって進攻したのであるが、元老院側に組した北イタリアの都市アクィレイアで思いがけず頑強な抵抗にあってこれを抜くことができず、その軍隊は食料不足に陥った。そして、皇帝の指導力に不満をもった兵士が、五月末マクシミヌス帝とその息子を遂に殺害してしまった。この軍隊は、首都からやってきたプピエヌス帝に降伏して元の駐屯地へ戻らされたため、内乱は今度は元老院の勝利に終わるかに見えた。ところが、そのおよそ一ヵ月後に首都の近衛隊が暴動を起こして二人の元老院皇帝を殺害し、カエサルだったゴルディアヌス三世を皇帝に擁立したため、結局この少年ひとりが単独皇帝となって一連の騒動は終息したのである。

論者によっては「二三八年の革命」とも呼ばれる④内乱の年の出来事は、概ね以上の如くである。

ところで、アフリカでの蜂起からゴルディアヌス三世単独統治に至るこの内乱では、僅か五ヵ月ほどの間に実に七人が皇帝位を相争ったことになり、甚だしい政治的混乱であったことはいうまでもない。しかし、二三八年の内乱がこれまでしばしば考察の対象とされてきたのは、単に混乱の甚だしさゆえではなかった。この事件には、様々な政治勢力や社会集団が登場し、また「軍人皇帝」の第一号であるマクシミヌスに対して元老院が独自の動きを見せたため、難解な紀元三世紀のローマ帝国の解釈に、さらにはその後のいわゆる後期ローマ帝国の政治的社会的体制を考察する上で、限りなく興味深い材料を提供するものとみなされたからと思われる。

とりわけ、この内乱の年を考察した多くの者がまず注目したのは、元老院の動き、あるいは元老院に関わる人々の動きであるといっても過言ではない。二三八年の出来事のなかで、元老院はローマ元首政史上異例と思われる積極的行動を見せた。それは、先に見たように、この内乱の推移において核ともいうべき部分を成している。元首政開始以来、皇帝選出における元老院の働きといえば、内乱で決着が着いたものであれ、近衛隊が擁立したものであれ、外部で決められた人物を承認するだけの消極的なものにすぎなかったが、二三八年の場合はその先例を大きく払い除ける積極的なものであった。しかも、この元老院のポジティヴな行動は、単に異例であるがゆえ注目に値するだけではなく、皇帝権力がますます増大して共和政的要素が後退しつつあったと一般的に理解されている紀元三世紀にあっては、ぜひとも解明されねばならない特殊なものといえるからである。[5]

以下の本稿では、この元老院の動きを中心にしながら、二三八年のローマ帝国を考察してみようと思う。次に、章を改めて、かかるテーマに関する学説史を瞥見し、問題点をより具体的に指摘することにしたい。

① 特に Herodianus, *Μετὰ Μάρκον Βασιλέως ἱστορία* (以下 Herod. と略記), 7, 1, 1; Eutropius, *Breviarium ab urbe condita*, 9, 1; Aurelius Victor, *Liber de Caesaribus*, 25.

② クロノロジーの点で参考にした研究書は数多いが、K. Dietz, *Senatus contra principem: Untersuchungen zur senatorischen Opposition gegen Kaiser Maximinus Thrax*, München, 1980 (以下 Dietz, *SCP* と略記) S. 345～347 に諸研究者の成果の比較があり、整理に役立つ。X. Loriot, Les premières années de la grande crise du IIIe siècle: De l'avènement de Maximin le Thrace (235) à la mort de Gordien III (244), *ANRW* II. 2, Berlin & New York, 1975, pp. 657～787 の研究整理も貴重で、筆者が参考にした文献もその pp. 720～722 の註にあげられている。より新しい研究書として M. Alram, *Die Münzprägung des Kaisers Maximinus I. Thrax*, Wien, 1989 をあげておく。

③ 息子の地位に関する新しい研究として、P. J. Sijpesteijn, Imperator Caesar Maximinus and Maximus Caesar, *ZPE* 68, 1987, S. 135～138 がある。

④ P. W. Townsend, The Revolution of A. D. 238: the Leaders and Their Aims, *Yale Class. St.* 14, 1955, pp. 49～105.

⑤ 二七五年に元老院は七五歳のタキトゥスを皇帝に選出したが、それは軍隊からの要請に基づくものであり、しかもその統治はすぐに終息して、アウレリアヌス帝とプロブス帝の統治の間の「合い間のエピソード」(W. Ensslin) でしかない。

二

二三八年の出来事に関する文学的史料は、ヘロディアヌスの『マルクス帝没後の歴史』や『皇帝伝集』(Historia Augusta 以下HAと略記）中の幾つかの伝記、およびアウレリウス・ウィクトルの史書等であるが、[1] なかでも唯一の同時代史料といえるヘロディアヌスの作品は、マクシミヌス帝に対して極めて敵対的で、彼を卑賤な出の残虐な暴君とし、アフリカでの反乱やその後の元老院の反マクシミヌス行動を暴君打倒の闘争として描いたため、近代以降の歴史叙述もこの見方に大きく影響された。かの Ed. Gibbon もこの見解に従い、『ローマ帝国衰亡史』第七章（一七七六年）でアレクサンデル・セウェルス帝の仁政と対比させながらマクシミヌスの暴政を論じた。[2] そして、元老院がゴルディアヌス父子の即位を承認したことについて、彼らの統治に元老院はアレクサンデル・セウェルス帝時代の「文治政治」の復活ばかりでなく、あわよくば共和政体の回復まで期待する甘い見通しを抱いた、と解説している。

史料批判の方法が確立されてのちは、Gibbon の如くに、ヘロディアヌスやHAなどの記事を鵜呑みにすることはためらわれるようになったようで、Gibbon の『衰亡史』の編者 J. B. Bury は、マクシミヌスの帝国防衛における功績を高く評価し、同帝が元老院に反感をもち、元老院もまたマクシミヌスを嫌ったことが、マクシミヌス即ち暴君という像を作る記録を多く残すことになった、と弁護している（一九〇〇年）。[3]

しかし、ヘロディアヌスやHAが「半蛮族」(*μεσοβάρβαρος*, semibarbarus)[4] と呼んだマクシミヌス帝のイメージは、容易には払拭されず、今世紀に入ってからもかかる観点から二三八年を解釈していこうという試みがなされた。その代表的な研究が、F. Altheim のものである。ローマ帝国の衰退の解釈などに「外交の優位」に立つ雄大な議論を展開した Altheim は、第二次世界大戦中、および戦後に刊行した幾つかの書物において、[5] この二三八年の出来事の中にローマ人対ゲルマン・イリュリア・マウレタニア人の戦いを見ようとする見解を明かにした。ゲルマン人、イリュリア人、マウレタニア人と

はいうまでもなくマクシミヌス側の軍隊を構成していた人々のことである。また、彼は、オリエント化された元老院とマクシミヌスを立てるイリュリア系勢力との対決とも表現した。Altheim は、マクシミヌスがゴート族出身で、初めて帝位に就いたゲルマン人であると主張しているが、このことは彼の二三八年解釈の前提のひとつとして、極めて重要である。Altheim とは異なり、社会経済史的視点から二三八年を解釈しようとしたのは、かの M. Rostovtzeff であった（『ローマ帝国社会経済史』一九二六年）[6]。彼は、この事件の本質は、反乱の中心をなす都市のブルジョワジーと農民的プロレタリアートを代表するマクシミヌス側の兵士との戦いにあると解して、自らの有名なテーゼを実証する極めて重要な例として位置付けたのである。ただ、彼もマクシミヌスを非ローマ的非伝統的人物とした点は、Altheim と同様である。

マルクス主義史家のなかにも、階級闘争の観点からこの事件に検討を加えようという者もいた[7]。しかし、文学的史料にはっきりと現われているように、反マクシミヌス側が支配階級ばかりで構成されていたわけではなく、属州アフリカの住民各層や首都の下層民までその勢力に投じており、単純な二項対立の図式は適用できない[8]。そこで、こうした状況を正確に把握し、かつローマ社会の構造の特質に関連させながら「社会闘争」(soziale Konflikte) として幅広くこの事件を考察しようとしたのが、G. Alföldy であった（一九七六年）[9]。

二三八年に関する諸研究は、上述の如きもののように、民族的対立や社会集団の対立を指摘するに留まらず、地域的な対立をも論点として提出した。例えば、反乱の勃発した属州アフリカの状況、特に皇帝領の実情を重視する T. Kotula（一九六〇年）や F. Kolb（一九七七年）らの見解がある[10]。とりわけ、ポーランドの学者 Kotula は、この事件におけるアフリカの反乱の自発性を強調しつつ、属州アフリカの帝国からの分離主義的傾向を持つ運動と見るべきことを説いた。

二三八年の出来事に関する研究や解釈のうち、特徴的なものを今幾つか紹介したが、前世紀後半より数多く発表されてきた諸研究の論点は多様であり、かつそれらは次元を異にしている[11]。先に見たように、民族対立、階級対立、地域対立などが指摘されて、それぞれ独自の問題群を形成しているのである。しかし、いずれの論点でも共通して意識されているの

は、マクシミヌス陣営と反マクシミヌス陣営の性格の違いである。この違いは、マクシミヌスと元老院との違いに代表されているといってもよかろう。ところが、研究史をより立ち入って眺めてみると、この両者のイメージ、実態の理解には相当大きな変化が生じてきているように思われる。そこで、次に、かかる点に配慮しつつ、本稿の具体的な検討課題である元老院の動きをめぐる学説史を論ずることにしよう。

かつては、文学的史料に安易に基づいて、元老院は無学粗野で残虐なマクシミヌス帝を嫌い、元老院議員仲間であるゴルディアヌスを支持した、とごく簡単に解説されてきたが、[12] 碑文史料による新たな知見やそれらに基づいたプロソポグラフィー的研究法の発展が、マクシミヌスのイメージを少しずつ変えると同時に、元老院を構成する議員たちの実態をより明らかにするようになった。

まず、「半蛮族」のレッテルを貼られていたマクシミヌスの出身地や即位前の経歴が再検討された。先に触れたように、F. Altheim は、マクシミヌス帝がゴート人で、最初のゲルマン人ローマ皇帝であると繰り返し強調したが、[13] W. Ensslin や E. Hohl が早くからこれを批判し（一九四一～二年）[14]、さらに R. Syme（一九七一年）[15] はマクシミヌスがドナウ地方のローマ人軍事植民市出身者で、三世紀に活躍するイリュリア人皇帝の最初の人とするに至った。マクシミヌスは、通例マクシミヌス・トラックスと呼ばれるように、トラキア出身とされてきたが、Syme は史料批判を厳密に行なったのち、モエシア出身であることを強調、また同帝が即位前に騎士身分の要職にあった点も詳しく論じた。

一方、元老院に関しても、研究の著しい発展が見られた。先に紹介したように、F. Altheim は、この時代は皇帝も元老院もオリエント化されており、それに対してドナウ軍団を率いるマクシミヌスが対立したのだ、と説いたのであるが、その際彼が参考としたのは、元老院の構成に関する P. Lambrechts のプロソポグラフィー的研究（一九三七年）[16] であった。しかし、当時の元老院の構成については、その後 G. M. Bersanetti（一九四〇年）[17] の研究を経て G. Barbieri の研究（一九五二年）[18] が現われて、Altheim の主張するような単純な民族的対立による二三八年の解釈を難しくした。即ち、Barbieiri

は、三世紀においても東方出身の元老院議員は全体の三三パーセントを越えず、二三五年から二八五年の間でもイタリア人元老院議員が四四・五パーセントを占めて最も多いことを明らかにしたからである。[19]

こうしたマクシミヌスの実像や元老院の実態の解明の進展と並行して、第二次大戦後、元老院の行動をより立ち入って説明しようとする試みが、幾人かの研究者によってなされた。A. Théodorides, H.-G. Pflaum, H. G. Mullens, P. W. Townsend, A. Lippold らの研究[21]がそれである。これらの研究のうち、とくに意義深いものは、H.-G. Pflaum と P. W. Townsend の成果である。Pflaum は、ガリアより出土した一ラテン語碑文――トリニーの大理石と呼ばれ、『ラテン碑文集成』第一三巻三一六二番に所収されているもの――を主材料として、アレクサンデル帝治下で指導的地位にあった人たちが、二三八年の反マクシミヌス行動やゴルディアヌス三世治世の初期において再び指導的地位にあったことを示そうとした。

これをうけて、P. W. Townsend は、かつての Bersanetti の研究[23]を訂正しつつ、属州ごとの反マクシミヌス行動への参加状況を解明した。そして、アフリカにおけるゴルディアヌスらの蜂起がアフリカという一地方の偶発的な事件ではなく、その蜂起から帝国全体にわたる反マクシミヌス行動に至るまで、第一級の元老院議員たちによって計画され、実行された「革命」であったと主張したのである。その際、彼が元老院議員たちの革命的行動の動機としてあげたのも、やはりアレクサンデル帝時代への回帰の願いであった。

二三八年における元老院の注目すべき行動の目的が、アレクサンデル・セウェルス帝時代の政治への復帰、さらにはそれを通じてアントニヌス・ピウスおよびマルクス・アウレリウスの両アントニヌス帝時代の政治の再現にあったという見解は、先にふれた Ed. Gibbon にまで遡りうるが、文学的史料ばかりでなく碑文史料等も援用して、新たなレヴェルで唱えられるようになったといえよう。ただ、Pflaum や Townsend の研究は、充分なプロソポグラフィー的基礎を持たなかったため、結果的に安易な説明との批判をまぬがれ得なかった。[22]

この欠点を克服し、元老院の革命的行動の原動力がアレクサンデル帝の政治への復帰であることをより強く主張しようとしたのが、一九八〇年に現われた K. Dietz の研究書であった。[23]『皇帝に反抗する元老院』と題された彼の著書は、師 A. Lippold がかつて手懸けたテーマ[24]を本格的に深めたものであり、マクシミヌス帝に対する元老院の驚くべき積極的な反抗の動機は何かという問題に、集中して捧げられている。そのかなりの部分は、研究の基礎となる当時の元老院議員に関するプロソポグラフィー的調査に費やされており、未公刊の学位論文多数を含む先行研究への充分な配慮の上にも立っているゆえ、[25]一九七〇年代初めまでの研究状況を整理した X. Loriot の論文（一九七五年）[26]とともに、当該問題の研究史に画期をもたらしたものといえよう。[27]次に、この Dietz の研究を検討し、本稿で論ずるべき問題点をより明確にした上で、筆者なりの具体的な考察を始めることにしたい。

① HAやアウレリウス・ウィクトル、そしてエウトロピウスに共通する史料たる史書の存在、所謂エンマンの Kaisergeschichte について は、H. Enmann, Eine verlorene Geschichte der römischen Kaiser und das Buch De viris illustribus urbis Romae, *Philologus* suppl. 4, 1884, S. 337～501. この説の扱いについては、さしあたり *Cambridge History of Classical Literature* II, 5, *The Later Principate*, Cambridge, 1982, pp. 54～55 参照。

② Ed. Gibbon, *The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776, ed. J. B. Bury, London, 1900, pp. 167～189. 中野好夫訳『ローマ帝国衰亡史』I、筑摩書房、一九七六年、一九三～二一八頁。

③ *ibid.*, p. 172, n. 11. 中野訳一九九～二〇〇頁。

④ *μεσοβάρβαρος*: Herod., 6, 8, 1. semibarbarus: HA, *Maximini Duo*（以下 Max. と略記）, 2, 5.

⑤ F. Altheim, *Die Soldatenkaiser*, Frankfurt am Main, 1939, S. 245～256; id., *Die Krise der alten Welt* III, Berlin, 1943, S. 114; id., *Niedergang der alten Welt* II, Frankfurt am Main, 1952, S. 297.

⑥ M. Rostovtzeff, *The Social and Economic History of the Roman Empire*, Oxford, 1926, 2nd. ed. 1957, pp. 439～442 & 451～458.

⑦ E. M. Schtajerman, *Die Krise der Sklavenhalterordnung im Westen des römischen Reiches*, Berlin, 1964, S. 351～359.

⑧ G. Alföldy, Soziale Konflikte im römischen Kaiserreich, *Heidelberger Jahrbücher* 20, 1976, S. 113～115.

⑨ ibid., S. 111～125.

⑩ T. Kotula, L'insurrection des Gordiens et l'afrique romaine, *Eos* 50, 1960, pp. 197～211; F. Kolb, Der Aufstand der Provinz Africa proconsularis im Jahr 238 n. Chr., *Historia* 26, 1977, S. 440～477. なお、コトゥーラの論文が入手できたのは、島根大学の小山哲氏のお力による。記して御礼申し上げる次第である。

⑪ 研究動向の把握にあたって参考としたのは，Dietz, *SCP* の特に Einleitung (S. 1～38)，X. Loriot, op. cit., pp. 659～724，および G. Walser u. Th. Pekáry, *Die Krise des römischen Reiches*, Berlin, 1962 などである。わが国では長谷川博隆氏が反証を起した「若者たち」について（『古代ローマの若者』三省堂，一九八七年，二五九～二六一頁），松本宣郎氏が二三八年の首都民衆について（「帝政期ローマの民衆とエリート」『西洋史研究』新輯第一七号，一九八八年，一九～二六頁），それぞれ言及している。

⑫ 古くは，Gibbon, *loc. cit.* より新しいものでは J・P・V・D・ボールスドン（吉村忠典訳）『ローマ帝国』平凡社，一九七二年，二四四頁（原著出版は一九七〇年）など。

⑬ 註⑥に記したものの以外に，F. Altheim, Die Abstammung des Maximinus Thrax, *Rhein. Mus.* 90, 1941, S. 192～206; id., Zum letzten Mal: Maximinus Thrax, *ibid.* 91, 1942, S. 350～353.

⑭ W. Ensslin, War Maximinus Thrax ein Germane?, *Rhein. Mus* 90, 1941, S. 1～17; E. Hohl, Nochmals die Abstammung des Maximinus Thrax: ein rein quellenkritisches Problem, *ibid.* 91, 1942, S. 164～181; id., Die „gotische Abkunft" des Kaisers Maximinus Thrax, *Klio* 34, 1942, S. 192～206.

⑮ R. Syme, *Emperors and Biography : Studies in the Historia Augusta*, Oxford, 1971, pp. 179～193.

⑯ P. Lambrechts, *La composition du Sénat romain de Septime Sévère à Dioclétien*, Budapest, 1937.

⑰ G. M. Bersanetti, *Studi sull'imperatore Massimino il Trace*, Roma, 1940.

⑱ G. Barbieri, *L'Albo senatorio da Settimio Severo* a Carino, Roma, 1952.

⑲ Barbieri やまだ「オリエント人」の数を高く見積り過ぎていたことについては，Dietz, *SCP*, S. 271f. を参照。

⑳ A. Théodoridès, Les vigintiviri consulares ex S. c. reipublicae curandae en 238 de notre ère, *Latomus* 6, 1947, pp. 31～43; H.-G. Pflaum, *Le marbre de Thorigny*, Paris, 1948; H. G. Mullens, The Revolt of the Civilians A. D. 237～238, *Greece & Rome* 17, 1948, pp. 65～77: P. W. Townsend, loc. cit.; A. Lippold, Der Kaiser Maximinus Thrax und der römische Senat, *BHAC 1966 / 1967*, Bonn, 1968, S. 73～89. なお，筆者は Pflaum の著書はその一部しか披見しえず，J. Carcopino, Le marbre de Thorigny, *REA* 50, 1948, pp. 336～347 などで補った。

㉑ Bersanetti, *loc. cit.*.

㉒ Syme, *op. cit.*, p. 160.

㉓ Dietz, *SCP*.

㉔ Lippold, loc. cit..

㉕ ちなみに，Dietz の過剰とも思われる文献の列挙には，T. D. Barnes のように率直に嫌悪感を表明した者もある（*Phoenix* 35, 1981, p. 386）。

㉖ Loriot, loc. cit.,

㉗ 本書には書評・紹介が数多く寄せられた。披見しえたもののみ記しておく。*Gnomon* 54, 1982, S. 478～485 (Alföldy); *ZRG* 98, 1981, S. 438～440 (Kloft); *Class. Review* 32, 1982, p. 106f. (Liebeschuetz); *Phoenix* 35, 1981, p. 386f. (Barnes); *HZ* 234, 1982, S. 638～640 (Castritius); *Latomus* 91, 1982, pp. 673～676 (Jacques); *Mus. Hel.* 39, 1982, p. 341f. (Béranger); *German Studies* 15, 1982, S. 57～59 (Boterman); *AHR* 86, 1981, p. 821f. (Simon).

三

先述したように、Dietz の著書の最大の特徴は、その徹底したプロソポグラフィー的研究にある。特に二三五年から二三八年までに確認できる八七名の元老院議員について、その出自、経歴などを詳細に調査している。著者はそこにおいて、まずこの時代もやはり元老院議員の半数以上がイタリア出身者であることを確認する。しかし、それ以上に重要なことは、皇帝がアレクサンデルからマクシミヌスへと替わっても元老院議員や主たる騎士身分の者の経歴には連続性が認められ、帝国統治官吏は継続していたことを発見したことである。[1]

Dietz が調査した元老院議員は、当時元老院を構成していたメンバー全体の数に比すれば決して多くはないが、それにしても、知られうるすべての材料を駆使した結果、ヘロディアヌスなどの文学的史料が与えていたイメージとは違い、二三五年のマクシミヌス帝の登位、即ち「軍人皇帝時代」の到来は、現実の統治レヴェルではさしたる変化をもたらさなかった、ということが明らかにされたのである。

では、Dietz は、元老院の反マクシミヌス行動の動機をどこに求めたか。それは、マクシミヌスが即位後アレクサンデル帝の顧問会（Consilium Principis）を解散して、そのメンバーを迫害したこと、および元老院議員二名を裁判なしに処刑して議員の特権を無視したこと、である。このふたつが元老院との関係を悪くしたとみるのであるが、とりわけ、前者が重視されている。それは、元首政を皇帝と元老院との二元統治、デュアルヒーと捉えた場合、その内の元老院の権能をアレクサンデル帝はこの顧問会を通じて保証していたと考えるからである。

結局 Dietz にとっては、アフリカにおける蜂起は単なる火花にすぎず、二三八年の事件はアレクサンデル帝の元側近だった者たちに指導された元老院多数派がアフリカの反乱を機会として利用し復讐にでたものであり、彼らはその英雄であるアレクサンデルと同様に、アントニヌス朝君主の理想を追うことに熱中していた、ということになる。[2]

当該時期の元老院構成者に関する Dietz の精緻な研究は、問題を考察する前提について新たな水準をなしたといってよいであろう。しかし、その書評者の一人 G. Alföldy が指摘するように、[3] Dietz の見解は、彼が研究の大半を費やしたプロソポグラフィーからではなく、最終的には在来より使われていた文学的史料から導きだされたものであった。しかも、彼の見解は、アレクサンデル帝の政治、特にその元老院政策、わけても顧問会に対する高い評価を前提としているが、この点については学界で完全に意見の一致をみているわけではない。通説的には、アレクサンデル帝は他のセウェルス朝君主と異なり、元老院の権威を回復した名君といわれ、[4] かの J. Burckhardt など「古代の聖王ルイ」などと称賛している[5]が、一方では、アレクサンデルの対元老院政策はみせかけだけで、内実は他のセウェルス朝君主と変わりはない、と述べる者もいる。[6] このように見解が別れる重大な原因は、アレクサンデルの対元老院政策の要である顧問会の実態が明確でないことにあろう。Dietz の見解で注意すべき点がもうひとつある。それは、彼や Townsend らが二三八年の元老院の行動をアレクサンデル帝政治への復帰と解釈するのは、アレクサンデルの顧問会と、二三八年に形成され二人の皇帝を選出する母体となったあの二〇人委員会とを同質のものとみていることにも拠っている、ということである。

そこで、こうした見解の是非を検討するため、まず、アレクサンデルの顧問会の性格を考察し、続いて二〇人委員会の方を調べて、両者の共通点、相違点などを考えてみたい。アレクサンデル帝の顧問会とは、Dietz が「団体としての元老院の統治権力への実質的な参加」と見做したようなものであったのであろうか。[7]

管見の限り、この顧問会に関する新史料の発見はないようで、従来通りの文学的史料を再検討することになるが、[8] まずヘロディアヌスは次のように述べている。

「そして、彼〔アレクサンデル帝〕はまず第一に、皇帝の顧問（σύνεδροι）そして助言者（αὐτιβουλοι）として一六名の元老院議員を選んだ。彼らは齢を重ねて威厳があり、また節度ある暮らしぶりをしている人々であった。彼らがよく審議し適切と認めなければ、如何なる声明も出されなかったし、如何なる行動もなされなかった。……元首政の形態は、恥ずべき暴政からアリストクラシーへと変

化したのである。」（六巻、一、二）

アレクサンデルが一六名の元老院議員を選んだことは、たいへんな改革であって、皇帝政治の性格を変えてしまうほどの意義のあるものだったといっているのである。これに続けて史家は、アレクサンデルのこの政治体制は、元老院と同じように、民衆や兵士たちにも賛成されたとしている。[9] ただ、この部分からは、この顧問たちの担当した具体的な仕事内容を直接知ることはできない。

さらに、ヘロディアヌスは、第七巻冒頭部分では次のように記している。

「さて、彼〔マクシミヌス帝〕はすぐにアレクサンデルに伴っていたすべての友人たち（φίλοι）、元老院によって選ばれていた顧問（σύνεδροι）を処分した。その幾人かはローマに送られ、また幾人かは何らかの理由を付けられて、中央政府から除かれたのである。」（七巻、一、三）

この記述から、一六名が元老院によって選ばれたらしいことがわかるのであるが、自身がアレクサンデル帝の顧問のひとりであったと思われるカッシウス・ディオの記録を保存するゾナラスの史書は、ヘロディアヌスとは趣を異にする情報を与える。

「彼〔アレクサンデル帝〕は直ちにその母ママエアをアウグスタとし、彼女が国事の指導を引き継いだ。彼女は、息子のまわりに賢人たち（σοφοί）を集め、……また元老院の中の優れた人々を（τῆς γερουσίας τοὺς ἀμείνους）助言者（σύμβουλοι）として選び、為されるべき事すべてを彼らに告げた。」（一二、一五）[10]

ゾナラス（ディオ）によれば、顧問会会員の選抜の主体は、皇帝の母ママエアということになるのである。わずか一三歳で即位した若い皇帝アレクサンデルに対して、アウグスタである母后の及ぼす影響は大きく、とりわけ治世初期は両者は一心同体であったであろう。元老院がどのような経過をへて一六名の議員を選んだかは知る由もないが、その人選がママエアの納得するものでなければならなかったことは想像に難くない。

なお、このゾナラス(ディオ)の文中に現われる σοφοί を、J. Crook は単なる professors ではなく、一六名の議員たち以外に顧問に選ばれている友臣(amici)であるとするが[11]、左様厳密に解さねばならない理由は特にない。(Crook の見解については、次章でもう一度触れる。)

一方、HA中の「アレクサンデル伝」は、より具体的な情報を提供する。

「彼〔アレクサンデル帝〕は、宮廷官房の長たちや、最も学識があり最も彼に忠実な法律家たち——当時その第一人者はウルピアヌスであったが——に、国事と訴訟をよく審議し整理した上で自分に提出するよう指図した。……彼は、二〇名の最も学識ある法律家たちと、演説に優れた賢人たち少なくとも五〇名——というのは、元老院決議を成立させるのと同じ数だけの投票数を顧問会(consilium)において得ておきたかったのである。——と連携することなしには、如何なる命令(constitutio)も発しなかった。各人に意見が求められ、発言したことはすべて記録された。しかし、重大な問題に関しては、然るべき熟考無しにぶっつけ本番で語ることを強制されないよう、調査と思考のための時間が与えられた。さらに、法律や国事を扱うときには学識ある演説に長けた人だけを関わらせ、一方軍事上の問題を論ずるときは、退役した軍人や、よく勤務して栄誉を得、地の利や戦闘の仕方そして陣営について熟知している老人を招くのが常であった。……」(一五、六〜一六、三)

ここに現われる二〇名、および五〇名の会と、先のヘロディアヌスらが伝える一六名の会がどのような関係にあったかが、直ちに問題となろう。HAという史料の性格上、在来の研究者たちの中には、この文章のいうところを疑う者も少なくない[12]。ここには元老院の決議に必要な定足数が言及されており、事実『テオドシウス法典』(六、四、九)より三五六年のプラエトル選出のための定足数が五〇名と知られているけれども、アレクサンデル時代にこの史書のいう通りであったかについては、研究者たちは判断を控えているように思われる[13]。

さらに「アレクサンデル伝」は、その末尾の第六八章で、顧問会に属していた人々を紹介しているが、有名な法学者ウルピアヌスとパウルスを除くその他の人々についてはその実在を確認できず、HAの虚構というのが今日の定説になって

いる。[14]

このように、アレクサンデル帝の顧問会の実態を確定するためには、以上の如き難点を多く抱えた史料をどのように評価するか、まず判断が求められることになる。ただ、ここではHAの史料的価値全体について論じることはできぬものの、さしあたり筆者には、HAの伝える顧問会を全く切り捨てることは不適切のように思える。

そもそも、ヘロディアヌスはアレクサンデルをマルクス・アウレリウスに継ぐ良き皇帝として描き、HAの作者はアレクサンドロス大王やトラヤヌス帝から借りた特徴をもって、アレクサンデル帝を理想的な君主として描こうとした。[15] こうした史家たちの姿勢は、他のセウェルス朝諸君主とは異なるアレクサンデルの政治の性格から生まれ出たものであろう。先述したように、彼は一三歳で即位した。統治にあたって補佐が必要であったことはいうまでもない。後述するように、一六名の元老院議員の会はそのために設けられたと推定する学者もいる。[16] これは、それ以前の近い過去にはなかったものとして、中央政界において注目すべき存在であったと思われ、史家たちがアレクサンデル帝の政治に先帝たちとは異なる印象を持つ材料となった可能性が高い。しかし、先にみたように、この会の具体的な仕事は史料から直接は知られておらず、膨大な政務、あるいは戦争指導のために、伝統的な皇帝側近たちの会である顧問会が機能していたことはまず確実であって、一六名の会の創設によって消滅したとみるのは無理があるように思われる。むしろ、伝統的な顧問会の方も何らかの改革がされたとみたほうが自然ではなかろうか。M. Hammond の指摘するように、[17] HAのこの記事には誇張されたところがあるかもしれないけれども、以下の行論では、これを全く無視することはせず、批判的に分析しながらさらに考察を進めてゆくことにしたい。

① 既に Syme (*op. cit.* p. 191) が、軍事属州総督についてその継続を推定してはいる。

② 特にその結論部 (S. 343) をみよ。

③ G. Alföldy, *Gnomon* 54, 1982, S. 479.

④ 例えば、P. Groebe, M. Aurelius Severus Alexander, *RE* 2, 1896, Spp. 2539f.; Rostovtzeff, *op. cit.*, pp. 421 & 721; R. Hanslik, Aurelius II-30 (Severus Alexander), *Der Kleine Pauly* I, München, 1975, Sp. 770. なお、Dietz, *SCP*, S. 287 A. 88. の諸文献も参照。

⑤ J. Burckhardt, *Die Zeit Constantins des Grossen*, 2. Aufl. Leipzig, 1880, S. 9.

⑥ 例えば、W. Eusslin, The Senate and the Army, *CAH* XII, Cambridge, 1939, pp. 57～62; M. Hammond, *The Antonine Monarchy*, Rome, 1959, pp. 381 & 408.

⑦ Dietz, *SCP*, S. 304.

⑧ ディオが前二九年のこととして記している、かの「マエケナス演説」に現われる顧問会(Dio, 52, 15, 1～4; 52, 33, 3～4)を、アレクサンデルの顧問会を想定したものとして分析することがあるが、F. Millar の如くこの部分の執筆時期をカラカラ帝代とする学者もおり、その内容からも直接分析対象とするには困難が伴うように感じられるので、今はこれをとりあげることを避けることにする。

⑨ Herod., 6, 1, 2.

⑩ Zonaras, 12, 15=Boissevain, *Dio Cassius* III, p. 477, Selection 2=*Loeb ed. of Dio* IX, pp. 488～489.

⑪ J. Crook, *Consilium Principis*, Cambridge, 1955, p. 88 n. 2.

⑫ 古い研究文献については Hammond, *op. cit.*, p. 406, n. 56. をみよ。より新しくは、Ensslin, *CAH* XII, p. 57f.; Syme, *op. cit.*, p. 156; W. Kunkel, *Kleine Schriften*, Weimar, 1974, S. 218 A. 89.

⑬ この定足数に関する議論については、Hammond, *op. cit.*, p. 278 n. 64 & p. 407 n. 56 を参照。なお、R. J. A. Talbert, *The Senate of Imperial Rome*, Princeton, 1984, p. 138. は、「もしHAを信じることができるなら、セウェルス・アレクサンデル治世では元老院決議成立のためにわずか七〇の定足数で十分だった」と曖昧な書き方をしている。

⑭ D. Magie, *Loeb Scriptores Historiae Augustae* II, 1924, pp. 312f. n. 1; Syme, *op. cit.*, p. 156.

⑮ Syme, *op. cit.*, p. 155.

⑯ 本稿四七頁。

⑰ Hammond, *op. cit.*, p. 379f.

四

皇帝の顧問会の存在は、初代アウグストゥス帝より知られる。もっとも、それは、共和政時代の政務官が人材を集めて顧問会を形成し、政策決定に際して意見を聴いた伝統を踏まえたものである。皇帝は随時その裁量に応じて人材を選び顧問会を構成したが、次第に制度として整えられるようになった。通説的な理解に従えば、二世紀前半のハドリアヌス帝が一つの「改革」をなし、[1] 法学者で常設の顧問会を形成して、顧問会構成者には俸給が支払われるようにしたという。二世紀後半のマルクス・アウレリウス帝時代より、この顧問会において近衛隊長(praefectus praetorio)が指導的役割を果たすようになった。ただ、顧問会の歴史は決して明快なものではなく、史料の関係上細かな点で不明の部分が多い。アレクサ

ンデルのそれも、その代表的な例といえるかもしれない。

さて、そのアレクサンデルの顧問会であるが、先に紹介した諸史料から再構成されるその像は、研究者の間で一致をみているわけではない。H. M. D. Parker[2]が最も史料に従順で、一六名の会と七〇名の会があり、さらにその七〇名の会は、二〇名の法律家のグループと五〇名の一般的なアドヴァイザーたちに別れていた、とする。W. Ensslin[3]も、「摂政会議」と通常の「元首（皇帝）顧問会」の二つの会の存在を語り、O. Seeck[4]もヘロディアヌスの伝える一六名の会を「顧問会というよりむしろ後見人の会議という性格を持つ」としている。さらに E. Cuq[5]は、アレクサンデルがまだ若い間は「摂政会議」が機能し、帝が自ら統治するようになると伝統的な顧問会が再構成された、とする。ところが、J. Crook[6]は、ヘロディアヌスの伝える会、即ち先に「摂政会議」と呼んだものと、HAの伝える顧問会とは同一のものと考えている。

史料が少ないばかりでなく、内容がたいへん曖昧でかつ矛盾を孕んでいるため、解釈が様々であるのは当然かもしれない。また、このアレクサンデルの顧問会の問題は、皇帝（元首）の顧問会（Consilium Principis）全体の性格をめぐるより大きな議論とも関係している。即ち、皇帝の裁判や法制定に関与する顧問会と、政治や軍事の討論のために皇帝が召集した助言者たちの集まり、「国家会議」（Staatsrat）と呼びうるようなものの間には、原理の面でも実践においても明確な区別が存するとする W. Kunkel[7]の立場と、その区別を否定する J. Crook[8]の立場の対立である。先に Crook がアレクサンデルの二種の顧問会を同一のものと解していることを紹介したが、それは彼のこのような基本的立場に由来しているのである。

かつて Th. Mommsen[9]は、皇帝の顧問会に三種の異なった制度が存在すると主張した。その一つは、アウグストゥスが創始し、ティベリウス治下の二六年まで存続した、選ばれた元老院議員たちによる会議であり、第二は、元首政期を通じて存した政治・行政上の顧問会であり、第三は、とりわけハドリアヌス帝により整備された裁判や法制定のための会議である。Mommsen のいうところでは、この第一のものに類似したものが、アレクサンデル帝下の元老院議員一六名の会

である。

Crook の研究書の目的は、この Mommsen のいう第二の顧問会と第三の顧問会の間に区別が存しないことを論証することに置かれているといってよいが[10]、その際彼は、アレクサンデルの一六名の会は、アウグストゥスの元老院議員の会、つまり Mommsen のいう第一の会とは本質的に異なるとし、これをアレクサンデルの顧問会全体に包摂させてしまう[11]。

一方、Kunkel は概ね Mommsen の説に従順である。彼は、皇帝の顧問会のうち、史料から知られるのはほとんど裁判に関する顧問会 (das Gerichtskonsilium) であるが、アレクサンデル治世には、元首政初期以来久々に制度化された元老院議員の会議も現れるとする[12]。しかし、それは「摂政会議」などというものではなく、裁判に関する顧問会の「変種」にすぎないという[13]。

今、元首政期全般にわたる議論をする余裕はなく、Kunkel と Crook のいずれが適切な見解であるか判定することはできないが、アレクサンデルの顧問会の組織と権能をできる限り正確に知るために、必要な検討は最大限にしておかなければならない。まず、ヘロディアヌスは、アレクサンデルの政治について次のように言っている。

「市民の行政や法律業務は、雄弁の評判が極めて高く、法律の技能をも備えている人物たちに委ねられた。軍事は、軍紀を維持し戦争を遂行し得る能力を認められた証しの名声を保持する者に任された。」(六巻、一、四)

この部分は、裁判関係と政治・軍事関係のスタッフが明確に分けられていることを示してはいるけれども、いかにも一般的な表現であり、制度的な別々の顧問会の存在を立証するほどの根拠足りえない。

さらに、皇帝の顧問たる友臣 (amici) を示すギリシア語 φίλοι の使用状況を検討してみると、ヘロディアヌスの第六巻、第七巻の関係箇所でその性格がわかるものは皆、政治や軍事上の問題で皇帝の相談役を示している[14]。しかし、φίλοι は全く同様の意味でマクシミヌス帝についても用いられているから[15]、アレクサンデル帝の顧問会を考える手がかりにはならない。前章で紹介した第六巻冒頭部分(一、二)や第七巻冒頭(一、三)に現れている σύνεδροι や σύμβουλοι も、どの程度厳

密に作家が用いているか疑問であり、*συνέδριον* が裁判関係の顧問会を、*συμβούλιον* が政治問題に関する顧問会を表わすとした Kunkel の考えを[16]、直ちに受け入れることは難しいように思われる。総じて、ヘロディアヌスのルーズな表現から、会の厳密な性格を知ることは難しいといわねばならないのである[17]。

初代皇帝アウグストゥスの編成した元老院議員の会議と、アレクサンデルの一六名の会の類似性が指摘されているので、この問題についても触れておく必要があろう。スエトニウスによれば、アウグストゥスは、自分のために任期六ヵ月の委員を抽選で選び、元老院にかける案件の予備的な審議を彼らとともにしたという[18]。カッシウス・ディオは、アウグストゥスが、コーンスル、ほかの政務官の各々一名、その他の元老院議員より抽選で選ばれた一五名を任期六ヵ月の委員（*σύμβουλοι*）とし、彼らを通して元老院構成者全体に案件を伝え、また彼らとともに予備的な審議を行なったと伝えている[19]。さらに、アウグストゥスは死の前年この会に改革を行ない、抽選ではなく彼の自由に構成者を選べるようにした[20]。その結果、この元老院議員の会議は、皇帝の個人的な顧問たちの会と同質のものとなったと指摘されている[21]。

このアウグストゥスの会の目的が、元老院会議に先立つ予備審議にあったことは明白である[22]。元首政成立直後に作られたこの会は、皇帝と元老院の関係がたいへん緊張していた時期にあって、元老院の側には政治参加の実現という印象を与え、皇帝の側には元老院の全体的な様子をあらかじめ知る上で有用となっていた[23]。改革されてのちも、この会の目的は元老院会議に先立つ予備審議に置かれたことに変化はなかったであろう。もちろん、皇帝権力が確立してゆけば、いずれ不要となるものではあった。

これに比してアレクサンデルの一六名の会については、元老院会議のための予備審議というような役割や任期制は全く知られていない。この会は、マクシミヌス帝によって解散させられるまで、その最期までアレクサンデル帝（およびその母后ママエア）に付き従ったようであるが[24]、具体的にどのような活動をしていたのか、詳細は不明というしかない。ヘロディアヌスが記す *φίλοι* が、この顧問会のメンバーを指しているとすれば、政治・軍事の面で皇帝にその都度助言を与えたこ

とになるけれども、その場合でも、顧問会やそのメンバーたる元老院議員に従来と異なる特別の権限があったことを示すような証拠は皆無である。

おそらく、先に紹介したような Ensslin や Seeck の見解、即ちこの会を「摂政会議」ないし「後見人会議」とみる考えが、若い皇帝のために選ばれたこと以外、何ら積極的な証拠があるわけではないものの、真の姿に近いと思われる。統治のシステムの詳細に通じない史家ヘロディアヌスよりも、帝の近くにあり、その治世に二度目のコーンスルとなったほどのディオ（その記事を伝えるゾナラス）のほうが信用できるゆえ、[25] この一六名の会は、手続きはともかく、ママエアが主導して息子のために選んだ補佐団であったとみるのが無難である。彼らは、あくまでも皇帝とその母のために働いたのである。

一方、HAの伝える顧問会を、通説的解釈に従って、一六名の会とは別の伝統的な皇帝の顧問会とみなした場合、[26] 政治・軍事・司法の各分野での活動に関与するものであったようであるが、その場合、会合の際の手続きや参加人数の点で多少の充実を認めてよいかもしれないが、誇張を好むこの史料の性格上、それ以上の評価は控えたほうが賢明かもしれない。[27] そして、HAの文章を素直に読む限り、「改革」がなされたとしても、それは元老院のためではなく、皇帝の自由な、そして恣意的な国政運営のために都合の良い体制造りであったと考えてよいであろう。[28]

以上、先行研究の注目した問題点に関わりながら、アレクサンデルの顧問会についてその組織や権能を明らかにしようと努めてきたが、史料の制約上、確たることはあまり言えなかった。しかし、そのことは他面、これまで同皇帝の政治を元老院の権威の回復、元首政のアウグストゥス的伝統への復帰と積極的に解してきた学説について、その拠って立つ根拠がいかに危ういものであるか示すことになったとも思われる。

そもそも、国制に準拠する総体としての、つまり Dietz のいうデュアルヒーの一方としての元老院と、それに所属する議員個人やそのグループとは、帝政期にあっては明確に区別されねばならない。Dietz の見解は、その議論の根本において曖昧であるといわねばなるまい。[29] アレクサンデルの顧問会は、元首政初期のアウグストゥス治世に存し、次のティベ

リウス治世にはもはや不要になった議員たちの会とは異なる。顧問会に元老院議員が集められ、政策決定過程に参画しえたにしても、それは議員個人のレヴェルの問題であり、総体としての元老院の権威増大に繋がったわけではないのである。むしろ、皇帝の元に少数の元老院議員が――場合によっては騎士身分の者とともに――集まって相談するような顧問会が拡充すれば、皇帝権力を強化こそすれ、総体としての元老院の存在を益々無意味にしていくといえるであろう。事実、「皇帝は法より解放される[34]」とし、皇帝の絶対的な権限を法文で明確にした法学者ウルピアヌスは、このアレクサンデル帝の治世前半の近衛隊長であったのであり、先に紹介したHAの記事によれば、彼がこの顧問会の少なくとも法律部門のリーダーであったのである。

ところで、これらの顧問会は、どのように運営されていたのであろうか。会の存在ばかりが強調されて、その実際の運営に対してはあまり注意が払われてこなかったように思われる。はたして、Dietz が「元老院の統治権力への実質的な参加」とみなしたような働きを、元老院議員たちはなしえたのであろうか。実は、この点を証明できる史料はない。しかし、間接的ではあるものの、Dietz の見解を否定する史料はあるのである。まず、同時代人で皇帝の近くにあったカッシウス・ディオは、次のように述べている。

「この人〔エラガバルス〕の死後、アレクサンデルがすぐ皇帝となったが、彼はドミティウス・ウルピアヌスなる者に近衛隊の指揮や他の国事を委ねた。」（八〇、一、一）

法学者ウルピアヌスがアレクサンデル帝の権力代行者であったことは、他にHAもしばしば教える。例えば、

「そして、事実、彼〔アレクサンデル帝〕が優れた皇帝でありえたのは、主にこの人物〔ウルピアヌス〕の助言に従って国家を統治したからである。」（アレクサンデル伝、五一、四）

「彼〔アレクサンデル帝〕はパウルスとウルピアヌスに特別の栄誉を与えた。……ウルピアヌスはアレクサンデルの顧問であり、官房の長であったといわれている。」（同、二六、五）

先に紹介した「アレクサンデル伝」一五の六もこの点を示証するものに加えられよう。

ウルピアヌスはアレクサンデル治世のごく初期(おそらく二二二年のうち)に近衛隊長になった。[31] 本章冒頭で述べたように、既にマルクス帝頃より、近衛隊長が裁判に関わる顧問会で指導的な働きをみせるようになっていた。政治全般に於いても指導性を強めた近衛隊長は、ついに二一七年マクリヌスが皇帝位に就くことで頂点を極めた。ウルピアヌスも、法律関係ばかりでなく、先の史料から窺えるように、多方面に指導性を発揮したと思われる。アレクサンデルは、勅法においてウルピアヌスを parens meus と親しく呼び、また、彼のために、もはや不適切になっていた近衛隊長の騎士身分所属を廃し、コーンスル格の元老院議員としたと伝えられる。[32] 彼が活躍したのはアレクサンデル治世の前半[33]であったが、治世開始とともに一六名の顧問会が新設された新たな政治状況にあっても、実質的に指導的な力を有したのは、元老院より選ばれた顧問たちや、その会合ではなかったのである。[34]

アレクサンデル帝は、元老院と皇帝との共同統治という政治のアウグストゥス的スタイルといいうるものを回復した、と評されることがある。彼のもとにあった顧問会は、そうした彼の政治姿勢を最もよく表わすものとしてしばしば取り上げられる。しかし、それらの顧問会について知り得ることは、以上の如くであった。それが、Dietz らがイメージしているものと相当に異なっていることは、改めていうまでもない。

① Crook, *op. cit.*, pp. 56~65 はこの「改革」を認めない。
② H.M.D. Parker, *A History of the Roman World from A.D. 138 to 337*, London, 1935, pp. 105~107.
③ Ensslin, *CAH* XII, p. 58.
④ O. Seeck, consistorium, *RE* 4, 1896, Sp. 929.
⑤ É. Cuq, Mémoires sur le Consilium Principis d'Auguste à Dioclétien, *Mémoires présentés par divers savants à l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres de l'Institut de France* sér. I vol. IX part 2, 1884, p. 345f. なお Hammond, *op. cit.*, p. 409 n. 63 も参照。
⑥ Crook, *op. cit.*, pp. 86~91.
⑦ Kunkel, *Kleine Schriften*, S. 421 および、Crook の研究書に対する書評 (*ZRG* 72, 1955, S. 463~470. 再録 *Kleine Schriften*, S. 595~601) を特に参照。
⑧ Crook, *op. cit.*, p. 2 および Reprint Edition (1975) の Preface to the Reprint を特に参照。

⑨ Th. Mommsen, *Römisches Staatsrecht* II³, Berlin, 1887, S. 902～904 u. 988～992. 学説の把握は、Crook, *op. cit.*, p. 2 に拠る。

⑩ Crook, *op. cit.*, p. 2.

⑪ *ibid.*, p. 87.

⑫ Kunkel, *Kleine Schriften*, S. 421.

⑬ *ibid.*, S. 219.

⑭ Herod., 6, 2, 3; 6, 5, 1; 6, 7, 4. それ以外に φίλοι の現れるところは 6, 9, 7（帝やその母とともに殺害された。）7, 1, 3（マクシミヌスによる解散）7, 1, 9（クトルティヌスの厚遇）。

⑮ Herod., 7, 8, 1; 7, 8, 3; 8, 5. 9.

⑯ Kunkel, *Kleine Schriften*, S. 421.

⑰ 別の観点からの同じ指摘は、C. R. Whittaker, *Loeb Herodian*, vol. II, 1970, pp. 150f. n. 2.

⑱ Suetonius, *Augustus*, 35, 3.

⑲ Dio, 53, 21, 4f..

⑳ ibid., 56, 28, 2f.

㉑ 弓削達『ローマ帝国の国家と社会』岩波書店、一九八四年、一八八頁。このアウグストゥスの会については、次のものをみよ。Kunkel, *Kleine Schriften*, S. 190～195; Crook, *op. cit.*, pp. 8～20. Crook はここでも独自の見解を表明している (p. 16)。

㉒ Suetonius, *loc. cit.*; 弓削達、前掲書、同頁。

㉓ 弓削達、前掲書、同頁。

㉔ Herod., 6, 9, 7; 7, 1, 3.

㉕ ヘロディアヌスの評価がディオの史書より低いことは、一般的に認められている。*The Cambridge History of Classical Literature* vol. II, part 5, p. 52. 参照。ヘロディアヌスの史書や作家については、そしあたり次の論文集所収の関連論考を参照せよ。G. Alföldy, *Die Krise des römischen Reiches*, Wiesbaden, 1989.

㉖ 即ち、Crook の説に従わないということである。

㉗ 同じ結論は、Hammond, *op. cit.*, p. 380.

㉘ 本稿四四頁引用史料中、とくに *Alexander*, 16, 1: ut non minus in consilio essent sententiae, quae senatus consultum conficerent に注目せよ。

㉙ その基本的主張と異なり、Dietz はあるところで次のようにも書いている。「政治・軍事上の重要問題は、たしかにその大部分が皇帝とその母によって、皇帝に接近にたいへん近い騎士身分や元老院議員の友臣たちよりなる極めて親密なる集団の中でもって秘密裏に相談・決定され、その後初めて『公的な』会議の友臣たちに提示されて、遵守的な決定がなされた。」(S. 308)

㉚ *Dig.*, 1, 3, 31. cf. *Cod. Just.*, 6, 23, 3.

㉛ Syme, *op. cit.*, 147. ウルピアヌスについて詳細は、W. Kunkel, *Herkunft und soziale Stellung der römischen Juristen*, Graz, 1967, S. 245～254 を参照。

㉜ 勅法は *C. Just.*, 8, 38, 4; 4, 65, 4 参照。身分昇格については、*Alexander*, 21, 3 など。詳細は、そしあたり次をみよ。Mommsen, *op. cit.*, II, S. 866.

㉝ ウルピアヌスが被殺したのは、二二八年のことと長らくされてきた（例えば、Kunkel, *Herkunft und soziale Stellung der römischen Juristen*, S. 246）が、近年では *P. Oxy.* XXXI, 2565 に基づき、二二三年説をとるものもある (Syme, *op. cit.*, p. 153; F. Horak, Ulpianus, *Der Kleine Pauly* V, Sp. 1042)。

㉞ 騎士身分官吏の影響力がアレクサンデル帝治下でむしろ増大したと Kunkel は指摘している (Kunkel, *Kleine Schriften*, S. 219f.)。

五

アレクサンデル帝の顧問会に比し、二三八年の二〇人委員会に関する史料は一層乏しい状態にある。ヘロディアヌスの史書はこれに直接言及しておらず、会の正式名称すら碑文史料からようやく知られるにすぎない。[1]

ＨＡは数箇所においてこれに触れているが、例えば、「マクシミヌス伝」（三二、三）では次のように記している。

「デクシップスは次のように伝えている。即ち、マクシミヌスはあまりに憎まれていたために、ゴルディアヌスたちが滅ぶと、元老院はマクシミヌスに対抗する二〇人委員会を創設した（viginti viros senatus creaverit, quos opponeret Maximino）。」

さらに、「ゴルディアヌス伝」（二二、一）は次のように伝える。

「両ゴルディアヌスの死後、元老院は激しい動揺とマクシミヌスの暴力に対する恐怖のなかで、国家を護るために選出された二〇人委員から（ex viginti viris, quos ad rem publicam tuendam delegerat）プピエヌス（マクシムス）とクロディウス・バルビヌスという両コーンスル経験者を選び、皇帝とした。」（註――ＨＡはバルビヌスの名を間違えている。本論文本文後述部分参照）

碑文に Viginti viri ex senatus consulto rei publicae curandae と記録されているこの委員会[2]にどのような人物が選出されていたかについて、これまで研究者たちが多大の関心を寄せてきたが、今日のところ判明しているのは、皇帝となった二名を含めても僅か六名に過ぎない。[3]

まず、皇帝となったバルビヌス（D. Caelius Calvinus Balbinus）は、バエティカ出身と推定されるパトリキで、二一三年に二度目のコーンスル職（正規コーンスル）に就いている。もうひとりの皇帝であるプピエヌス（M. Clodius Pupienus Maximus）は、イタリア出身の新人である可能性が大きい。しかし、補充コーンスル就任後、ゲルマニア総督、アシア総督を歴任、二三四年には二度目のコーンスル職（正規コーンスル）とローマ市長官職を手にした人物である。ルキッルス・マケル（L. Caesonius Lucillus Macer Rufinianus）はイタリア出身のパトリキで、補充コーンスルののちクラトル職を二度務め、二三

八年以後もアフリカ総督やローマ市長官の職に就いている。クリスピヌス（Rutilius Pudens Crispinus）は、イタリア出身の新人で、補充コーンスル就任後、二三八年にはアクィレイア市防衛戦の指揮官となり、その後もヒスパニア・キテリオル総督やクラトル職を務めた。モノフィルス（Tullius Monophilus）もクリスピヌス同様、補充コーンスル就任後、二三八年にアクィレイア市防衛戦で指揮官を務め、その後は下モエシア総督となっている人物である。アキリウス（Valerius Claudius Acilius Priscianus）はイタリア出身のパトリキで、二三三年に正規コーンスルとなり、その後クラトル職に就いた。二五五年頃ローマ市長官職につき、その翌年には二度目の正規コーンスル職を手にしたことが知られている。

これら六名の人物についてまず指摘できることは、全員がコーンスル格の元老院議員であることであろう。Townsendは二〇人委員全員をコーンスル格の有力元老院議員であろうとしているが[4]、この推定はおそらく正しいであろう[5]。次に、殺害された二皇帝を除く四名全員が、ゴルディアヌス三世治世以降も役職に就いて政界で活躍している点を指摘することができよう。ただ、ゴルディアヌス三世治世以降、この二〇人委員会が存続した可能性はない。ゴルディアヌス三世単独統治時代に、とりわけ近衛隊長ティメシテウスがその指導力を発揮するまでは、この二〇人委員会のメンバーが、国事に参画する有力者のなかに入っていた可能性は大きいけれども、一つの組織として存続した証拠は皆無である。

少ない史料から知られるこの委員会の活動の課題は、マクシミヌス帝からイタリア、そして首都を防衛することに置かれており、そのために軍指揮者や使者を派遣したりしている[6]。先にあげた六名のうち三名は、その経歴や所領保有等よりイタリアの都市に対してパトロンとして力を行使し得たことが推定されるが[7]、防備の指図などをするうえで好都合であったであろう。しかし、これがこの委員会の知られている活動のすべてである。元老院勢力の中心として軍人皇帝に決死の抵抗を試みたこの特異な存在については、しばしば過大評価がなされがちであるが[8]、やはりこの委員会は、マクシミヌスと戦争状態になった緊急時の対策とみるべきであろう[9]。元老院が選出の母胎となっているけれども、そこに何らかの計画らしきものを認めることはできないのである。

以上、数章にわたってアレクサンデル帝の顧問会と二三八年の二〇人委員会とをみてきた。材料が限られているゆえ、詳細な分析は期し得ないのであるが、これまでの考察よりみて、両者の性格には直接的な繋がりがあるようには思われない。人的構成の面でも、知られている人物が少なすぎるため、調査すらできない。[10]

だが、われわれはここで考察を止めず、少し認識を改めて続けなければならない。これまでわれわれは、これらの会議のもつ組織のあり方や実質的な権限の如何を追求してきたが、そうしたいわば絶対的な価値とでもいうべきものではなく、いま少し相対的な、即ち、当時の政界の雰囲気とか元老院議員の心情といったものに対する意義のような点に目を向けてみる必要がある。すると、そこには一つの共通点を見いだすことができるように思われる。

アレクサンデル帝の政治上の「改革」とみられるもののうち最も印象的な措置は、一六名の元老院議員の会議を設けたことであった。先の検討によるならば、この会議や個々の参加者には帝国政治に対する革新的な実効力があったわけではないようであるが、有力貴族を集めた会議の新設は、元老院議員が政治に大きく参画しているような印象を、中央政界の内外に与えたであろう。史家ヘロディアヌスの如き政治の実態を詳細に把握しえなかった者[11]には、先に引用した一節（六巻一、二）にみられるように、アリストクラシーへの転換と感じられたに違いない。

一方、二三八年の二〇人委員会も、コーンスル格の高級元老院議員で構成されていたと考えられる。彼らの指導する反マクシミヌス戦争中の首都の政治体制もまた、アリストクラシーの如き外観を呈していたであろう。この二三八年の二〇人委員会は、全く同じ権限を有する二名の皇帝プピエヌスとバルビヌスを選出するという、元首政史上異例の行為をなしたが、これは共和政時代のコーンスルを想わせるものであり、当時の政治の趣を理解させてくれる。

要するに、二三八年の元老院の積極的な行動は、アレクサンデル帝時代の外見・体裁に留まったアリストクラシー的政治を、結果的に実効力ある政治権力として実現させた、と解せるのである。アレクサンデル時代の政治と二三八年の「革命的」政権との関連性は、このようなレヴェルで初めて指摘できるのであって、在来の論者の主張するが如き直接的な連

続性は見出しえないのである。従って、反マクシミヌス闘争へと元老院議員たちを結集させた原動力についても、アレクサンデル帝時代の政治の回復であると答えることは、直接的には難しいことになるであろう。

むしろ、われわれが注意を向けるべきは、如何なる状況下でかかる実効力ある政権の出現が可能であったかという問題である。そもそも元老院が積極的な行動をとるようになったのは、アレクサンデルの死の直後ではない。マクシミヌスが即位してから三年ほどしてのことである。そして、元老院議員たちが結集して主体的な行動をとったのは、マクシミヌス帝の死までであった。マクシミヌスの死後、元老院のたてた二皇帝の間にトラブルが生じ、彼らが近衛兵に殺害されゴルディアヌス三世の単独統治になっても、元老院総体としては、何の行動も起こそうとはしなかった。これまでわれわれは元老院議員の側ばかり考察してきたけれども、こうした点を考慮に入れるならば、元老院議員たちの結集の原動力を説き明かすためには、その共通敵たるマクシミヌスの特殊性といったものを勘案する必要があることがわかるであろう。元老院議員たちにとって、マクシミヌスとはどのような皇帝であったのであろうか。次章では、かかる観点から新たに考察を進めてゆくことにしたい。

① *CIL* 14, 3902=*ILS* 1186.

② 正式名称はないが、この委員会に言及している文学的史料は、本文で紹介したもの以外に HA, *Gordianus*, 10, 1; 14, 3; A. Victor, 26, 7; Zosimus 1, 14, 2. 碑文では ILS 8979.

③ Dietz, *SCP*, S. 326〜340 が詳しい。その人物のプロソポグラフィー・リストもみられたい。以下の本文の人物紹介も、主としてそれに拠っている。

④ Townsend, *op. cit.*, p. 64.

⑤ *ILS* 8979 中の nn inter XX *cos* を comes Augustorum nostrorum inter XX *consulares* と補った H. Dessau の読みが正しければ、まず誤りないだろう。

⑥ Herod., 8, 2, 5; 8, 5, 5; HA *Maximus et Balbinus*, 10, 1; 12, 4.

⑦ Whittaker, *op. cit.*, p. 281 n. 2.

⑧ 例えば Townsend, *op. cit.*, pp 98〜105; W. Ensslin, *CAH* XII, p. 78.

⑨ Whittaker, *op. cit.*, p. 227 n. 1.

⑩ Townsend, loc. cit. は反マクシミヌス議員をゴルディアヌスのパルチザンとみているが、アフリカとローマ市との直接の繋がりについてヘロディアヌスは何も述べていない。Whittaker, *op. cit.*, p. LXXIX 参照。

⑪ ヘロディアヌスの史料的価値については前章註㉕の文献を参照。

六

元老院議員たちにとって、マクシミヌスとは如何なる皇帝であったのであろうか。

史料においては、ヘロディアヌスにせよ、HAにせよ、元老院サイドに立った歴史叙述とされるものがマクシミヌスを告発する時のポイントは、その低い出自と残酷さに置かれていることは、一目瞭然である。しかも、この二点は密接な関係にある。低い出自ゆえに無教養なため残虐な行動をとった、というわけである。従って、すべての根源は、彼の出自の低さということになろう。[1]

ところで、こうした史料に基づくマクシミヌス像を訂正せんとしたのは、既に紹介しておいたように、R.Syme の研究であった。[2] 彼は、マクシミヌスの出身地をトラキアではなくモエシアとした。[3] 通常マクシミヌスに添えられるトラックスという名は、史料上は四世紀末に初めて現れるのであり、Syme の諸史料を吟味した議論には学ぶところ多い。「トラキア農民の子」ないし「ゴート人の子」から「ローマ人兵士の子か孫」へとマクシミヌスを捉え直した成果は大きい。しかし、首都から遠く離れた地方で育ち、読み書きの充分な教育を受けたとも思えず、ただただ巨漢・怪力でもって兵士として名をなしたにすぎぬ人物という在来のマクシミヌス像を、本質的に変えたとは言えないように思われる。

また、Syme は、マクシミヌスが即位前に騎士身分の要職にあった点を強調する。[4] マクシミヌスは、一騎兵として軍人経歴を始め、その巨漢と怪力によって出世し、史料に不安があるものの、騎士身分に昇格して、即位するまでにその身分の者が付くポストを幾つか歴任しているようである。[5] おそらく認めてよいものは、二三一年ないし二三二年頃のエジプト駐留の軍団の長、二三二年ないし二三三年頃のメソポタミア総督、そして、二三四年のライン辺境における新兵の訓練の責任者(praefectus tironibus)[6] である。このうち、あとの二つの職務は、当時の軍事上たいへん重要と言える。ただ、これらの職務にあったゆえに首都の元老院に所属する人々に親しく評価されていたとは、特に思われない。

さらにSymeは、こうした経歴の精査とともに、マクシミヌスとマクリヌスの類似性をも強調する。[7] マクリヌスはマウレタニアのカエサレア出身、低い出自で騎士身分にもかかわらず、二一七年皇帝となった。そのマクリヌスは、即位後自分の同僚であったオクラティニウス・アドウェントス――一近衛兵士として経歴を始めた、ほとんど読み書きのできない男――をローマ市長官、そして二一八年のコーンスルに任じた。かつてパンノニア軍の一兵士で総督の門番をしていたアエリウス・トリッキアヌスは、二一七年には第二パルティア軍団の長となり、さらにマクリヌスによって下パンノニアの総督とされた。かかる先例をみるならば、マクシミヌスの即位は決してスキャンダラスな異常事態とは言えない。これらは、セウェルス帝時代の戦争と激動の所産なのだ。Symeはこのように主張する。

確かにマクリヌスは、マクシミヌスに先立つ唯一の元老院議員ではない皇帝である。しかし、彼は近衛隊長であった。騎士身分とはいえ、中央にあっては、皇帝に次ぐ権力保持者といってよい。周知の通り、既に二代皇帝ティベリウス治下で近衛隊長セイヤヌスが皇帝位を窺っている。[8] マクリヌスはマウレタニア出身ではあったけれども、騎士身分の文官経歴を進み、五年間近衛隊長を務め、二一七年初めにはコーンスル格顕彰を受けている。[9] 並の元老院議員より格が高いのである。首都の元老院議員の目からみた場合、辺境での戦争に明け暮れていた兵士マクシミヌスと異なることはいうまでもない。また、マクリヌスは二一七年四月より二一八年六月まで統治したにすぎないが、カラカラ帝に対する反動もあって、当初は元老院が彼を支持したようにすら思われる。[10] ローマ史全体の流れのなかで、その位置付けを粗く問うのであれば、Symeの把握は決して誤りではなかろう。しかし、元老院議員の視点から皇帝の性格を細かく観察するとなれば、即位時の身分が同じ騎士身分であるからといってマクシミヌスとマクリヌスを同列に置くことは、不適切と言わねばならない。

文学的史料のマクシミヌス批判には、ステレオタイプな表現があることは言うまでもない。にもかかわらず、上述のことを考慮に入れれば、元老院議員にとってマクシミヌスの登位は、やはり衝撃的であったと思わざるをえない。この人物の登位は、おそらく彼らの全く予期せぬところであった。マクシミヌスを知っている人も、巨漢・怪力の兵士としての彼

のイメージしかもっていなかったであろう。J. P. V. D. Balsdon は *Romans and Aliens* という著者のなかで、マクシミヌスを Alien と見、その巨漢であったことに注目しているが[11]、その特別な容姿も手伝って、彼は元老院議員たちの世界には異質な人物と受け取られたに違いない[12]。

しかし、元老院はこの人物を一応承認した[13]。これまでも、元老院に何の相談もなく皇帝がたてられてきたが、元老院はその都度その人物を承認してきたから、今回が特に例外ではない。そして、マクシミヌスからの圧力下とはいえ、亡きアレクサンデル帝に対して「記憶の抹消」の断罪も行なったのである[14]。だが、マクシミヌスはこれまでの皇帝たちとは異なる行動をした。即位して三年間、ライン・ドナウ地方を転戦するだけで、一度も首都に来ようとしなかったのである。ローマ市長官や近衛隊長を送り込み、強圧的な指示はするものの、元老院で即位の挨拶をしたり、その経過を弁解したりすることなど、セウェルス朝以前の諸皇帝がなしてきたことを、マクシミヌスは一切無視したのである。ましてや、ネルウァからマクリヌスまでの諸皇帝について記録があり、おそらくアレクサンデルも行なったであろう「元老院議員を殺さぬ誓い[15]」など、なされるはずもなかった。

先の Syme もそうであるが、研究者の間には、マクシミヌスのような出自・経歴の人物が登位したり、その皇帝が首都や元老院を無視するような態度をとったりしたことは、決して突発的で異常な出来事ではなく、一、二世紀、そして特にセウェルス朝開始以降に進んだローマ社会の変貌の一帰結にすぎないとみる考えが、少なからずあるように思われる。しかし、ローマの伝統の担い手を自負する保守的な元老院議員たちにとって、自分たちの集団とは縁の薄い人物が皇帝となり、かつ自分たちを無視して君臨しはじめたことに、衝撃を受けないはずはなかった。しかも、先の諸章における検討で明らかにされたように、先帝アレクサンデルの統治は、その実際の権限においてはともかくとして、アリストクラシーのごとき印象を与えるものであったから、元老院に集う人々の意識における落差は決定的なものであったと推察される。

かかる事態は、皇帝の元老院議員階層からの完全な遊離と呼んでよいものであろう。このことは、皇帝が周囲から隔絶

された超越的な存在となる後期ローマ帝国時代の政治状況への変容を考える上で、特に注目すべきことと筆者は考える。周知の如く、元首政開始時にアウグストゥスは自らを「元老院の第一人者」（Princeps Senatus）あるいは「同等者の中の第一人者（primus inter pares）とした。[16] 圧倒的な権力を握る彼にとって、それはまさに政治的配慮との解釈が一般的ではあるが、政情を安定させる上で単なるジェスチャー以上の意味を持っていたみるべきである。以来二百数十年の間、権限が次第に強化され、宗教上の権威も高まって、皇帝は一般市民からは次第に遊離するようになったにもかかわらず、自らの集団から皇帝を生み出し続けてきた元老院議員たちだけは別であり、対等の礼儀作法で皇帝と面談できたし、[17] 反乱や反抗によって皇帝のライヴァルとなりえるのも彼らだけであった。そして、即位した皇帝は、形式的ではあれ元老院から承認を得なければ正式の統治を始められなかったのであり、かつての同等者たちを属州総督や軍団指揮官等に迎え入れて政治参加させ、統治に協力させると同時に、政情の安定をはかったのであった。ローマ帝国の政治は剝き出しの暴力による力関係や法的関係のみで成り立っていたのではなく、政治支配層の間、あるいはそこから下へと張りめぐらされている様様な関係の網――庇護・保護関係や家族関係など――に基づいており、皇帝が安定した政権を実現しようとすれば、まず元老院に集う政治支配層を自己の支持者としてまとめあげねばならなかった。その際、出身地等の点で大きな変動があったにもかかわらず全体としては依然伝統的な価値観を有している元老院議員たちに対して、イタリア、なかでも首都ローマ市を重視し、元老院とそこに属する人々を丁重さを以て遇することが、皇帝の円滑な政治運営の秘訣であった。[18]

一つの機関としての元老院は実質的な統治能力を失っていったし、自ら皇帝を選ぶことはなかったけれども、新しい皇帝に承認を与え、その死にあたっては「裁判」を行なってその統治行為の有効性を判定するなど、皇帝を自らの代表者ないし共有物の如く位置付けていた。元老院の力は神秘的な感すらあり、その皇帝の実質的な権限の如何にかかわらず、元老院に敬意を払った皇帝とそうでなかった皇帝とは、その運命を異にする事が多かったのである。[19] 成立以後のいくたびかにわたる変転にもかかわらず、皇帝が元老院や元老院議員階層と不可分の関係を失うことなく政治を行なってきたところ

に、元首政の歴史の第一の特質があるといえよう。そして、皇帝は元老院階層の一員であり、この階層と共同してのみ皇帝は正しく統治権を行使しうるとの意識が、ディオやその時代の元老院議員たちにもまだ生き続けていたことを、既に J. Bleicken[20] が教えてくれている。三世紀に入ってからも、元老院議員たちは、元老院の構成者として、あるいは現実の政治指導層として、統治者を自らの階層の一員と認識しながら、絶えずその視野に入れていたのであった。

ところが、マクシミヌスは違った。その出自・経歴・即位の状況、あるいは即位後の行動をみるならば、彼の政権が政治支配層に何らの基盤をもたず、むき出しの暴力に基づくところ極めて大きいと考えられよう。[21] 彼こそは、真の意味で nondum senator[22] として帝位に就き、それにふさわしい行動をした最初の人物であったといえる。ここに、皇帝を自らの代表者ないしは共有物と位置付けていた元老院議員たちの観念は、音を立てて崩れ去ったのである。皇帝の元老院議員階層からの完全な遊離というこの深刻な事実が生ぜしめた危機感が、老練な元老院議員ゴルディアヌスを擁立したアフリカの反乱を機に、元老院に集う人々を結束させた。元首政史上異例な元老院の積極的行動の原動力は、深部においてこのように解明できるのではないであろうか。

① Herod., 7, 1, 1f.; HA, *Maximinus*, 1, 5～2, 6.

② Syme, *op. cit.*, pp. 179～193.

③ *Epitome de Caesaribus*, 25, 1; Iulius Maximinus *Thrax*.

④ Syme, *op. cit.*, p. 188.

⑤ マクシミヌスの経歴について、古くは M. Bang, Die militärische Laufbahn des Kaisers Maximinus Thrax, *Hermes* 41, 1906, S. 300～303; E.Hohl, C. Iulius Verus Maximinus, *RE* 10-1, 1918, Spp. 854～857; H. U. Instinsky, Das angebliche Legionskommando in der militärischen Laufbahn des Kaisers Maximinus, Claudius Gothicus und Aurelianus, *Klio* 34, 1942, S. 118～120. より新しくは、Syme, *op. cit.*, pp. 186～189; Loriot *op. cit.*, pp. 667～670 参照。

⑥ この職については、W. Ensslin, praefectus, *RE* 22, 1954, Sp. 1336 を参照。

⑦ Syme, *op. cit.*, pp. 189f.

⑧ 三一年、セイヤヌスは近衛隊長のまま正規コーンスルに就任、属州統治における皇帝の命令権の共有者にまでなったが、タキトゥスやスエトニウスによれば、陰謀を企てて失脚した。

⑨ Dio, 78, 13, 1.

⑩ Herod., 5, 2, 1; HA, *Macrinus*, 7, 1～4; Parker, *op. cit.*, pp. 98 & 329 n. 57.

⑪ J. P. V. D. Balsdon, *Romans and Aliens*, London, 1979, p. 215.

⑫ マクシミヌス像に関する学説史については、古くは Bersanetti, *op.*

cit., pp. 73～95. より新しくは Loriot, *op. cit.*, pp. 666～688 などを参照されたい。

⑬ ヘロディアヌスがマクシミヌスの統治に対する元老院の公的承認の有無を明らかにしていないため、承認を疑問視する説も出されていた（例えば、Altheim, *Niedergang der alten Welt* II, S. 236; Rostovtzeff, *op. cit.*, p. 439 その根拠は Victor, 25, 1）が、二碑文（*CIL* 6, 2001 et 2009）がマクシミヌスの sodales Antoniniani への加入記録を pro cos ex s(enatus) c(onsulto) として記録しており、あえて疑う必要はないように思われる。Whittaker, *op. cit.*, pp. 151 n. 3 & p. 166 n. 2 などを参照のこと。

⑭ W. Enßlin, *CAH* XII, p. 72; Alram, *op. cit.*, S. 25. 彼が二三八年に神格化されたことについては、Dietz, *op. cit.*, S. 340 をみよ。

⑮ A. R. Birley, The Oath not to put Senators to Death, *Classical Review* N. S. 12, 1962, pp. 197～199; Dietz, *SCP*, S. 29 u. 312～315.

⑯ 簡単には、E・マイヤー（鈴木一州訳）『ローマ人の国家と国家思想』岩波書店、一九七八年、三五〇頁。弓削達、前掲書、一〇一～一〇四頁など。

⑰ マイヤー、前掲書、三五〇～三五一頁。

⑱ 以上の皇帝政治存立のための実質的な基盤などについては、さしあたり次の拙稿を参照されたい。「セプティミウス・セウェールスとローマ元首政」『史林』六五―二、一九八二年、一〇四～一三九頁。「トラヤヌス政権成立への政治過程」『西洋古典学研究』三四、一九八六年、八一～九二頁。「ローマ五賢帝政治の成立」『史林』六九―二、一九八六年、一～三九頁。「憎まれた賢帝ハドリアヌス――政治史からみた五賢帝時代の実相――」『史林』七一―六、一九八八年、一〇六～一五三頁。

⑲ 同じ指摘は、A・H・M・ジョーンズ「最後の危機・衰退にむかうローマ帝国」J・P・V・D・ボールスドン編（長谷川博隆訳）『ローマ人』岩波書店、一九七一年、一〇三頁。

⑳ J. Bleicken, Der politische Standpunkt Dios gegenüber der Monarchie, *Hermes* 90, 1962, S. 444～467 bes. S. 463f.

㉑ ゴルディアヌスとの旧来からの敵対関係を伝えられているカペリアヌスと、マクシミヌスとの共通性を指摘されているデキウス（Syme, *op. cit.*, p. 192）を除けば、マクシミヌス側に味方した元老院議員は一人も知られていない。

㉒ HA, *Maximinus*, 8, 1; Eutropius, 9: neque ipse senator.

七

二三八年の内乱を総合的に把握し帝国史に正確に位置づけるためには、第二章で紹介したような民族、社会層、地域など様々な領域の問題に解答を与えなければならない。本稿は、問題を元老院の行動、とりわけ最初の「軍人皇帝」に対して首都の元老院議員を団結させた原動力は何か、というテーマに限定して「二三八年のローマ帝国」を考えてきたにすぎ

ない。その考察より得られたささやかな成果と展望を簡単に記して、小論の結びとしたい。

冒頭に述べたように、二三五年のマクシミヌス帝の出現は、いわゆる「軍人皇帝時代」の始まりとして、一般にローマ史の時代区分の指標として使われている。しかし、近年の研究は、帝国統治の役職人事など具体的な政策のレヴェルでは、マクシミヌス帝の政治はその先帝の時代と決して大きく断絶するものではなかったことを教えてくれる。彼の元老院議員迫害を伝える史書の記述は、その信憑性の点で甚だ問題があり、具体的な統治の面でマクシミヌスの登位にひとつの画期を見出だそうとするのは、容易ではなさそうである。本稿での議論に照らせば、結局のところ、二三五年の政治史上での重要な意義は、「名実共に元老院議員でない者がはじめて皇帝位に就いた年」というある意味で単純な事実においてよいのではないかと思われる。そうすると、二三八年については、皇帝の元老院議員階層からの遊離、ないしは「皇帝は元老院議員の代表者かつ共有物」という共通認識の動揺によって生じた危機感が、積極的な政治行動を導きだした年、ということができるのではないであろうか。

この後、マクシミヌスと同じような皇帝が次々と出現し、首都もその元老院も帝国の中心たる意味を減じてゆく。元老院議員も三世紀後半には軍団指揮権を奪われ、属州統治の任からも次第に排斥されるようになって、政治指導層としての役割を失ってゆく。そして、皇帝は彼らから一層遊離した超越的な存在になっていった。こうしたその後の「専制君主制」への政治過程を考える時、共和政期以来政治の中枢を占めてきた元老院貴族層と、それに基づき運営されてきた皇帝の政治体制、いわば「アリストクラシーとしての元首政」が最後の光を放った、二三八年のローマ帝国とはそのような状態にあったとみることができるのである。

〔本稿は、平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究(C)による研究成果の一部である。〕

（大阪外国語大学助教授）

The Roman Empire in A. D. 238

——The Senatorial Opposition against the First Soldier-Emperor Maximinus——

by

MINAMIKAWA Takashi

In A. D. 238 M. Antonius Gordianus, the proconsul of Africa, rose against the first soldier-emperor Maximinus. The Roman senate supported this rebellion. After Gordianus' defeat, organizing a committee composed of twenty members, the senate chose its own two emperors from members of this committee. With an indomitable will the senate resisted Maximinus and succeeded in putting an end to his political power and life.

In this article, analyzing the senators' driving force for this unity and action, the author tries to clarify the significance of the civil war in 238.

First, the author criticizes the view of Dr. K. Dietz. Dr. Dietz laid a stress on the *consilium principis* of the last Severan emperor Alexander Severus who was destroyed by Maximinus in 235, and grasped the driving force of the senate as the senators' intention of recovering the politics of Alexander Severus. The author of this article does not accept Dietz's interpretation of Alexander's *consilium*.

Secondly, the author expresses his own views, which are as follows. The most important strength of the senators was their accurate interpretation of crisis, themselves being members of the governing class. The knowledge of the crisis was instituted by Maximinus, who was not only the first soldier-emperor but also the first emperor alienated from the *ordo senatorius*. His rule broke off the principate as a senatorial aristocracy. As the politics of Alexander had all appearance of a senatorial aristocracy, the senators were deeply impressed by the change caused by Maximinus' personality and action.

In sum, the senators in 238 displayed the last remarkable activity as the governing class in the history of the Roman Principate.